

# 忽滑谷快天ノート(1) — 欧米巡錫の実情 —

金沢 篤

## はじめに

駒澤大学図書館の地下書庫の一角に、忽滑谷文庫のあることだけはかなり前から承知していた。だが、当の忽滑谷快天<sup>1</sup>がどのような人なのかはあまり考えたことがなかった。曹洞宗の僧籍を持つ佛教学部の昔のスタッフの一人とくらいにしか考えていなかった。忽滑谷快天がどのような曹洞宗の僧侶であり、どのような教員であり、どのような研究者であったか、など少しも考えようとしなかった。迂闊と言えば迂闊な話だ。自分が在籍している当の駒澤大学がどのような歴史を持つ大学であるかについても、その昔は「梅檀林」と呼ばれたとくらいにしか理解していなかった。

それがである。近代日本に於けるインド学や仏教学に関連する文献資料をランダムに蒐め、手当たり次第に資料を読み進める過程で、ふと一冊の瀟灑な書物に出会った。金文字入りの濃紺クロス装。『鍊心術』と題された 300 頁足らずの文庫本よりもさらに一回りも小さな書物である。忽滑谷快天著とあった。大正十四年刊。つまり筆者がこれから忽滑谷 [1925] と呼ぶことになる著作である。扉は表紙と同色の紺色インク、「忽滑谷快天識」と署名された 3 頁分ある「序」は、小豆色のインク、そして本文他は通常の黒インクと三色刷りのかなり凝った作りで、ビブリオマニアにもまことに魅力的な豆本である。

先ずはちょっと長くなるが、その「序」の全文を以下に引こう。

「モニエル、ウイリアムス云く『印度人はスピノザに先つこと二千有餘載はやく既にスピノザの汎神的一元論を創唱し、ダーヴィンに先つこと數百春秋にして、ダーヴィンの鼎に指を染め、進化論が未だ歐米の科學界に是認せられざる時、否、進化なる文字が未だ人類の言語中に存せざる時に方りて、はやくも進化論者なりき』と。げに印度は哲學の搖籃にして、宗教の家郷なり。

<sup>1</sup> 本稿に於て、筆者が忽滑谷快天等の歴史上の人物に対して敬称を省略することを諒とされたい。

印度の宗教と哲學とは世界人類の所有思想を包含す、汎神論あり一神論あり、多神論あり、無神論あり、唯物論あり《1》上はカント、ヘーゲル等の超絶的哲學論より、中はスウェデンボルグ一派の神祕説に及び、下は悪魔崇拜、生殖器崇拜等の鄙陋なる思想に至るまで一として備はらざるなし。

惟ふに印度は思想の熱帯國なり。それ熱帯の地たる、極めて生物の繁殖に適す。是を以て象馬牛羊の速かに生育すると同時に、悪蛇毒獸の猖獗を逞うするあり、美果芳艸の欣ぶべきあると同時に蚊虻蠹蠹の厭ふべきあるは數の免れざる所なり。

されば一方に於て幽玄高尚なる哲學あるも、他方に於て醜陋愚劣なる迷信の跋扈するは印度思想の特色と謂はざるべからず。且つそれ印度半島の地たる全く泰西の諸邦と國状を異にするものあり。何となれば歐米の國民は社會的方面に於て自由を得、精神的方面に於て自由を失へるの觀あり、之に反して印度國民は社會的方面に於て自由を失ひ、精神的方面に於て自由を獲たればなり。歐米の社會には個人の自由と權利とは最もよく尊重せらるゝと雖も、新思想は必ず迫害に遇ひ、新信仰の鼓吹者は往々其主義の犠牲となるを常とす。之に反して印度の社會には種姓の階級ありて、衆民等しく其桎梏の下に屈すと雖も、精神的方面には絶対に自由を享受しつゝあり、故に所有哲學上の意見は忌憚なく發表せられ、新たなる宗教的信仰は躊躇なく宣傳せらるゝも、何人も之に向て迫害を加ふるなし。かくて自由たる太陽は一切の思想的生物を繁殖せしめ、印度をして氣候の熱帯たると同時に哲學宗教の熱帯たらしめたり。

果して然れば予が本書に論述せる瑜伽論も亦多くの思想を混入し、薰蕕器を同うし、龍蛇相雜の通弊を有するや論なし。然れども北米の瑜伽はヴェダタの粹を抜き、之にパタンジャリの禪定を加味し、更に近世の哲學科學を以て其説明の便に供するものなれば、印度本國の瑜伽哲學と日を同うして論ずべきにあらず。されば北米の現行の瑜伽は其根本的觀念に於て實大乘の教理と相兄弟し、其實行的方法に於て我佛心宗に髣髴たる點極めて多し。殊に養氣鍊心の工夫に至りては佛祖正傳の禪法と雖も決して其上に出づる能はず。《2》具眼の士それ鷄玉の乳を揀ぶが如くして本書を繕き龍蛇を辨じ玉石を別つあらば幸いなり。《3》忽滑谷快天識]

いかが。巻頭におかれた忽滑谷快天のこの序文を目にして筆者は正直驚いたのである。おそらくは禪について語ろうとしているのだらう日本人のしか

も曹洞宗の禅僧による大正 14 (1925) 年刊行の著作の「序」に出る固有名詞が、「モニエル、ウィリアムス」、「スピノザ」、「ダーヴィン」、「カント」、「ヘーゲル」、「スウェデンボルグ」、「パタンジャリ」である。しかも真っ先に、現代においてもサンスクリットを扱う研究者にとっては神様の如きモニエル Monier-Williams の言葉<sup>2</sup>が見事な日本語訳で引かれているのである。まったく興味深い「序」文である。だが、このような「序」文を持つ忽滑谷快天の著作忽滑谷 [1925]、乃ち『錬心術』が、実は忽滑谷快天のそれに遙かに先立つ著作、大正 2 (1913) 年刊行の忽滑谷 [1913]、即ち『養氣錬心乃實驗』の改題しての復刻本であることを知り、時に読点の脱落などのある点はともかくとして、上引の序文の《1》《2》《3》箇所、元々は次のような件を持つことを知るならば、さらに興味はいや増しになるのではないか。

《1》唯心論あり、

《2》予や故山を去つて茲に半歳、北米の學術宗教を視察して親しく瑜伽思想に接するの好機を得、攷覈翫味以て我禪道に比較するに、覺えず妙旨を啓發する所少からず。これ豈佛祖の冥護たるなからんや。乃ち之を梓に上せ以て讀者が參禪の資糧たらしめんとす。

《3》大正二年五月二十日

最後の段落にこの書物の目的が端的に示されていると考えられるが、そこに「北米の瑜伽」などの語が踊っているところを見ると、もしかしたら、忽滑谷快天は、この著作を執筆する時点で米国に滞在している人なのだろう、英語は得意な禅僧なのだろう、と筆者ならずとも興味をかき立てられることだろうと思う。そう、筆者が駒澤大学の禅研究所年報に寄稿したく思う本稿は、禅学の専門家であろう、この忽滑谷快天への道、その禅学への道を辿る作業

<sup>2</sup> 忽滑谷の引用部分は、Monier-Williams[1891]のPrefaceの以下の一節と知れる。

“...the Hindūs were Spinozaites more than 2,000 years before the existence of Spinoza; and Darwinians many centuries before Darwin; and Evolutionists many centuries before the doctrine of Evolution had been accepted by the Scientists of our time, and before any word like Evolution existed in any language of the world.” (p.xii)

(「インド人は、スピノザ出現の2000年以上も前にスピノザ主義者であり、ダーヴィンに先立つこと数世紀にしてダーヴィン主義者であった。さらにわれらの時代の科学者たちによって進化論が受け容れられるよりも、また世界のどこかの言語に「進化」に相当する語が登場するよりも数世紀も早く、進化論者であった。」(筆者による直訳))

と言うべきものである。おそらく誰一人、筆者が忽滑谷快天について調査することなどを期待していないに違いない。したがって、筆者自身とんちんかんな道草にしかならないだろうとは端から予感しているが、それでも、忽滑谷快天をめぐる思いがけないトリビアルな事蹟が明確に浮かび上がらないものでもないだろう、とも考える。忽滑谷快天の遺族関係者の方々に非礼失礼の段あることを予め詫びておく必要があるだろうか。

## I. 忽滑谷快天という人

先ずは、忽滑谷快天について勉強して見ることから始めようと思う。その際に、大きなとっかかりを与えてくれたのが、かつて駒澤大学仏教学部のスタッフであり、筆者もそのお姿を一度ならず拝見したことのある山内舜雄先生の二冊の研究書、山内[2001]と山内[2009]である。とりわけ、山内[2009]は、その『統道元禪の近代化過程―忽滑谷快天の禪学とその思想〈駒澤大学建学史〉』という表題が指示する如く、筆者の思い描いている作業の貴重な成果とさえ言える書物であり、その後の研究作業の方向までもが具体的に指示予告されているものと言える。本稿は直接的には、この山内[2009]を絶対の前提としているのであるが、実質的にはその記述の意味を探り、時にそれを検証し、疑問とされていることがらを明らかにすることを目指している。駒澤大学にも禪学にも、曹洞宗や曹洞宗学にもほとんど無知な筆者如きが介入する余地はないことは明らかである。正直言って、筆者としては<道元禪の近代化>や<駒澤大学建学史>に何かもの申そうという気などはさらさらしない。あくまでも「近代日本におけるインド学・仏教学の成立と展開」を見据えての好奇心があるのみである。したがって、山内先生の両書に見られる貴重な知見を得て、それを自分なりにフル活用して、所期の目的に迫ってゆきたいと考える。

今の場合、筆者にとって、山内[2009]の巻末所載の、「忽滑谷快天先生略年譜」と、本文中にある山内先生のそれに対する補足的な説明を出発点とする。

そして筆者はその年譜を自分勝手にモディファイして筆者の目的にかなったより簡便な《忽滑谷快天略略年譜》を作成しておこうと思う。筆者の本稿での目的とは筆者による《略略年譜》中で、□に囲ったゴチック体で表わされた一段に関わるものである。すなわち忽滑谷快天の、「明治44(1911)年11月 宗命により宗教及び學術視察の為洋行、三年間欧米を巡錫する」の実

情の闡明のみである。

《忽滑谷快天略年譜》(1867-1934)

慶応 3(1867)年	誕生
明治17(1884)年	曹洞宗大学林入学、同20(1887)年3月同卒業
明治24(1891)年 1月	慶應義塾大学文学科入学、同26(1893)年12月同卒業
明治28(1895)年 8月	蓮光寺住職となる
明治29(1896)年 3月	東京曹洞宗高等中学林教授となる、同32(1899)年2月同辞任
明治33(1900)年 [5月]	日置黙仙師に随行して暹羅へ佛骨奉迎に赴く[同年7月帰国]
明治34(1901)年 9月	曹洞宗高等中学林監理兼教授となる、同35(1902)年9月同辞任
明治36(1903)年 9月	曹洞宗大学林英語講師の囑託となる、同44(1911)年8月同辞任
明治44(1911)年11月	宗命により宗教及び學術視察の為洋行、三年間欧米を巡錫する
大正 8(1919)年11月	曹洞宗大学教頭になる
大正10(1921)年 3月	曹洞宗大学学長になる
大正14(1925)年 1月	文学博士となる、同年3月駒澤大学学長になる
昭和 9(1934)年 3月	駒澤大学学長を辞任、同年7月11日遷化

さて、この《忽滑谷快天略年譜》でいったい何がわかるだろうか。日置黙仙師とは、大正5(1916)年に永平寺66世貫首になられた禅師。また山内[2009]所載の「忽滑谷快天先生略年譜」には「著書」欄も設けられていて甚だ便利である。忽滑谷快天の最初の著作が曹洞禅を外国に紹介するための英語で書かれた本であり、次いでその著作が、英語の本の和訳であったことは、注目すべきである。忽滑谷快天は、まさしく英語に堪能な稀有な禅僧であったのである。

ここで、忽滑谷快天に関するウィキペディア(本稿執筆中の2012年11月1日現在)の記述も見ておこう。これを、例えば上に引いた筆者による《忽滑谷快天略年譜》、山内[2009]所載の「忽滑谷快天先生略年譜」や山内先生による記述と比較してみる権利を当然のようにわれわれは持つのである。

《忽滑谷 快天(ぬかりやかいてん)、慶応3年12月1日(1867年12月26日)―昭和9年(1934年)7月11日)は、戦前日本の仏教学者、東洋思想家、陽明学者、曹洞宗の僧侶、文学博士。古代禅学及び東洋禅学思想史を研究し、禅仏教を内省主観主義として捉えた「忽滑谷禅学(忽滑谷派)」と呼ばれる

禅道思想を確立した。大正天皇の御大礼仏教雑誌『星華』、『達磨禅』創刊者。道号は仏山。

曹洞宗大学が大学昇格時に駒澤大学に改まると、初代学長に就任。駒澤大学の建学の理念「行学一如」、その実践項目としての「信誠敬愛」を打ち立てた。

### 経歴 [編集]

武蔵国入間郡古谷村（現・埼玉県川越市）の善長寺従弟、多摩郡東村山久米川（現・東京都東村山市）に遠藤太郎左衛門の4男として生まれる。

10歳の時、忽滑谷亮童の弟子として出家し名を快天と改める。1887年（明治20年）に曹洞宗大学林を卒業し、共立学校を経て、1888年（明治21年）に東京第一高等中学校（第一高等学校）に入学した。その後、一中を卒業後の1891年（明治24年）に、24歳で慶應義塾大学文学部に進学し、仏教学や実証主義学問を学ぶ。英語に堪能だったことから、最初の著作『Principles of practice and Enlightenment of the Soto Sect』は英語で出版した。明治26年（1893年）12月に慶應義塾大学文学部を卒業。

次いで Paul Carus（ポール・ケーラス博士）の『Buddhism and its Christian Critics』を翻訳出版。次いで、大乘仏教を展開した富永仲基の『出定後語』を出版。当時、多くの仏教学者たちが、大乘経典は信じる事ではなく、それを所依とした宗派は崩壊すると思っていたが、忽滑谷は逆に大乘の価値を大幅に見直し、批判精神による仏教の近代化を図った。

明治33年（1900年）、稲垣満次郎公使の斡旋により、仏舎利がシャム王室より日本の仏教徒に贈与されたこと期に [マ：筆者]、南条文雄とシャムに渡航。1901年（明治34年）に曹洞宗高等中学林の校長に就任。この時、学生服を法衣から着物に変えるなど大きな改革を断行。1905年（明治38年）には中国に存在していた『大梵天王問仏決疑経』を解説した論文を発表。これは、歴史的事実を否定し、禅宗の根本を揺るがすものだった。また、この時期にイスラーム研究や陽明学研究にも没頭し、イスラーム教の開祖・マホメットの研究も始める。

1911年（明治44年）に忽滑谷は曹洞宗から、欧米への宗教学術視察の命を受けて3年間留学する。欧米留学へ向かう途中にハワイに宗教視察員として10日間ほど滞在し、その際にハワイ中学校、ポールシティー本願寺小学校等で講演を行い、サンフランシスコをはじめ各地において仏教講演会を行った。1914年（大正3年）に留学より帰国し、翌年に日本政府より文学博士号

の国家学位を受ける。1919年(大正8年)に曹洞宗立大学教頭、1921年(大正10年)に学長に就任。曹洞宗立大学の大学令による旧制大学創立に尽力し、1925年(大正14年)には曹洞宗立大学を駒澤大学と改称して初代学長となった。

公職と研究の両方の面で充実する一方、多数の著作を発表。弟子は、国内のみならず中国や台湾、韓国など東アジア全体に及び、胡適や鈴木大拙、曹洞宗の岡田宜法や増永靈鳳、柳田聖山に継承されて「忽滑谷仏教学」と呼ばれる学派を形成するまでに至った。しかし、僧堂師家の原田祖岳とは、雑誌『公正』誌上(昭和3年9月号)で論争が起こったが、大学の学者である忽滑谷と僧堂の原田との嫉妬による確執であった。

忽滑谷の思想はその後、哲学、文学などの人文科学にとどまらず、物理学、生物学、天文学など、当時の最新の自然科学の知識を動員して仏教を論じ、岡田摘翠の『禅と催眠術』の序文を担当。忽滑谷の哲学的原理の帰結は、究極的な存在を宇宙そのものと見てついに「宇宙論」にまで達し、神秘主義的な天才的領域まで到達した。また、インド、中国を対象とし、その思想的展開をまとめた大著『禅学思想史』を完成させた。

1934年(昭和9年)に東京で講演中、脳溢血のため倒れてそのまま亡くなった。》

立派なウィキペディアの記述と言い得るが、果たしてその信憑性は如何。われわれにとってはまことに重宝するウィキペディアであるが、誰による何に基づいての記述かが明確でない点が惜まれる。絶対的に信頼を寄せ得ると思われる山内[2009]との齟齬が少なからず見受けられるのである。

## II. 忽滑谷快天の宗命による欧米外遊

山内[2009]の中から、この忽滑谷快天の三ヶ年に亘る欧米外遊に関する記述を拾い出して見よう。

「快天は明治四四年(一九一一年)十一月、宗命により宗教及び学術視察のため三か年、欧米に留学する。」(41頁)

「・・・快天の前半生は、明治四三年の母校文学科で英文學講師として教壇に立ったところで畢る。それ以後の交渉はない。四四年(一九一一年)十一月、快天は、欧米学術視察のため外遊することになり、大正二年帰朝するまで、それは三年間に及ぶ。」(93-94頁)

「・・・快天は、明治四十四年一月から大正二年まで、ほぼ三年間、欧米学術視察のため外遊するが、・・・」(94頁)

「外遊中の著書刊行は、もちろんない。それは大正二年から復活するが、筆者の識りたいのは、快天の欧米視察中の動静である。この点については、快天自ら語っていないので、これに触れた後人たちのわずかな資料を以て推察する以外に方法はない。」(95頁)

「・・・快天自ら外遊の結果を語らないのはなぜか。その複雑な心境を推量することこそ、筆者の与えられた重要な役目かもしれぬ。」(96頁)

「快天が視察したのは英・米の英語圏が主で、どうやら仏・独まで足を伸ばした形跡はない。おりしも大正三年勃発の第一次世界大戦前夜であるから、それは不可能だったかもしれぬ。いずれにしても欧米視察の内容がサッパリ分らぬのは、筆者にとっても、また快天に関心のある方も、不安のタネが残るのを否定することができない。」(98頁)

「それよりも略年譜によって、快天帰朝後の大正二年から大正八年までの、出版著書を、ひとまず明瞭にしておく必要がある。//大正二年においては、二月星文館より『宇宙美観』の改題本『達人達観』を、七月東亜堂より、『養気錬心の実験』を出版(此書ハ大正十四年『錬心術』ト改題、忠誠堂ニテ再版ス)とある。//また「London,Lueac [ママ] & Co,ニテ Religion of the Samurai.ヲ刊行ス」とある。おそらく洋行中に認めたものであろうが、Samuraiに関する著書を、英国視察中に著すところに、快天の面目躍如たるものを感じる。」(99-100頁)

「快天の欧米学術視察は明治四十四年一月<sup>3</sup>から三年間で、帰朝した大正二年(一九一三)は曹源がインド留学から帰った年でもあったのである。」<sup>4</sup>(258頁)

「忽滑谷快天先生略年譜」にも明記されている忽滑谷快天の外遊の実情が、どこからも明確に伝わってこないことが、山内先生ならずとも、読者の不満のタネである。山内先生はその「忽滑谷快天先生略年譜」の記述に合わせるように、「大正二年帰朝するまで、それは三年間に及ぶ」と記しておられる。山内先生の理解では、忽滑谷快天の「宗命による宗教及び学術視察の為洋行、三年間の欧米の巡錫」は、明治四十四(1911)年十一月～大正二(1913)年の三年間ということであろう。

<sup>3</sup> 言うまでもなく、これは単純な誤植。正しくは明治四十四年一月。

<sup>4</sup> 後述の結論を先取りするば、忽滑谷快天の帰朝は山上曹源の帰朝の翌年である。



ここで改めて考えてみたい。山内先生は忽滑谷快天の帰朝を、「大正二年」としているが、その根拠は何なのか？ 「忽滑谷快天先生略年譜」中の「明治四十四」の「十一月」からの「三ヶ年間」だけなのではないか？ また、「外遊中の著書刊行は、もちろんない。」の根拠は何なのか？ これはさらに無根拠と言うべきであろう。

《2》予や故山を去つて茲に半歳、北米の學術宗教を視察して親しく瑜伽思想に接するの好機を得、攷覈翫味以て我禪道に比較するに、覺えず妙旨を啓發する所少からず。これ豈佛祖の冥護たるなからんや。乃ち之を梓に上せ以て讀者が參禪の資糧たらしめんとす。

《3》大正二年五月二十日

筆者が本稿冒頭部で引いた、忽滑谷 [19130715] の「序」文を改めて考えてみたい。つまり、山内先生が、忽滑谷快天帰朝後の刊行と考えておられる、忽滑谷 [1913] の奥付の発行日は7月15日である。その序文を認めたのは、それに先立つこと二ヶ月ほどの5月20日である。そして、その序文の中に「予や故山を去つて茲に半歳、北米の學術宗教を視察して親しく瑜伽思想に接するの好機を得、攷覈翫味以て我禪道に比較するに、覺えず妙旨を啓發する所少からず。」とあるのに注目したい。「故山を去つて」とは、「日本を離れて」という意味であろう。「茲に半歳」とは、「日本を離れて、半年が経過した」ということで、大正2年5月20日に先立つこと半年の時点で（つまり大正元（1912）年11月ころ）、忽滑谷快天が故国日本を離れたと、忽滑谷快天自身が明確に告げている文章と解し得るのではないか。

また、山内先生が、忽滑谷快天が英国視察中に著し、帰朝後の出版と理解している、Nukariya [1913] であるが、その“Harvard Square, Cambridge, April, 1913.”と記された“Preface”には、“I regret not a little that I have not been able to give in detail references to the books on which my exposition is based. Travelling round the world, I have left my books in Japan, and have written mostly from memory; nevertheless, I have done my best to give the reader correct information” (p.ix), “An open acknowledgment of my sincere gratitude is due to Professor James H. Woods, of Harvard University, for his deep interest in this undertaking and for his constant help, and also to the Reverend Kōdō Yamada for his generous aid and suggestions” (p.x) と記されているのである。先ず、Nukariya [1913] の、この Preface の日付が、忽滑谷 [1913] の序の日付に先立つこと一ヶ月の April, 1913 (大正2 (1913) 年4月) であ

るという点に注目したい。しかもその場所が、“Harvard Square, Cambridge”であるというのも甚だ興味深い。Nukariya [1913] は、ロンドンの Luzac & Co. から出版された為か、山内先生は「英国視察中に著し」と解したのであろうが、忽滑谷快天がそれを書いたのは、英国ではなく米国はマサチューセッツ州であることである。しかも、さらに注目すべきは、James H. Woods との親密な連携の下で書かれたと明確に記されているのである。James H. Woods (1864-1935) とは、今日ヨーガ哲学研究者で知らぬ者のいない、Yogasūtra と Bhāṣya と Tattvavaiśārādī の英訳者である。Woods は Nukariya [1913] に後れること一年、つまり、1914 年にその英訳本を Harvard Oriental Series V.17 として刊行することになる。Woods は、忽滑谷快天より 3 歳年長である。なお、Nukariya [1913] は、「Samurai に関する著書」などではない。副題が明記する通り、歴とした「日本及び中国の禪」についての堂々たる書物である。さらに、Woods と共に謝辞が寄せられている Kōdō Yamada とは当時曹洞宗大学の教頭であった山田孝道<sup>5</sup>であろう。

忽滑谷快天は、この忽滑谷快天 [1913] と Nukariya [1913] の二冊をほぼ同時期に書いていたことになる。前者は米国視察中に学習した米国で普及している新ヨーガ哲学などについて日本語で、後者は日本と中国の禪について英語で、共に米国滞在中に書き著したと言えるのである。その二冊は、前者は東京の東亜堂から、後者はロンドンの Luzac & Co. から、共に大正 2 (1913) 年に刊行された。山内先生は、両書とも、忽滑谷快天の大正 2 年の帰朝後に刊行されたと理解しておられるようである。とすれば、山内先生は、忽滑谷快天の帰朝を、少なくとも忽滑谷 [1913] の発行日の 7 月 15 日以前と捉えておられるのである。忽滑谷快天が欧米遊学に向けて日本を離れたのは明治 44 (1911) 年 11 月と明記されているから、忽滑谷快天の遊学期間は 1911.11 ~ 1913.7 は足かけ三年、実質は一年八ヶ月足らずということになる。

筆者が最初山内 [2009] に見られるこの「理解」に接した時、帰朝の時期はともかくとしても、先に見た忽滑谷 [1913] の「序」文の記述からして、忽滑谷快天が宗命によって欧米に旅立ったのは、明治 44 (1911) 年 11 月ではなく、一年後の大正元 (1912) 年の 11 月なのではないか、と思ったのである。忽滑谷 [1913] の「序」を文字通りに受け止めるならば、そのように考えざるを得ない。【略年譜】の記載になにか大きな誤りがあるのではないかと

<sup>5</sup> 山田孝道は、後出の『和融誌』第 18 巻などの編集&発行者でもある。

うに至ったのである。だが、程なくして、先にも引いたウィキペディアの記述を見た。つまり、忽滑谷快天はその【略年譜】の記載通りに、明治44(1911)年11月に出て、その後の行程としてハワイ行きが具体性をもって語られ、しかも欧米遊学を終えて帰朝したのが、大正3(1914)年と記されていることを見るや、はたと暗礁に乗り上げた気分襲われた次第なのである。このウィキペディアの記述は、誰の何に基づくのであろうか。きっと何か堅固な客観的な根拠があるのだらう、と考えるに至ったのである。

だが、それも程なく知れた。インターネット上で閲覧できる浅井宣亮(2011)の中で、山内先生によっては知れないとされていた「快天の欧米視察中の動静」が、浅井氏によって次のように記されていたのである。

「忽滑谷は、1911年欧米留学へ向かう途中、ハワイ宗教視察員として10日間ほど滞在した。その際、ワイパフ中学校、カワイロア中学校、ハワイ中学校、ポールシティー本願寺小学校など、曹洞宗とは直接関連のない学校でも講演をおこなった。そして前述のようにワイパフ布教所の状況など、ハワイの現状を日本曹洞宗の中央に紹介した。…忽滑谷は1914年留学より帰国し、1919年曹洞宗立大学教頭、1921年学長となる。1925年には曹洞宗立大学を駒澤大学と改称して初代学長となった。」(298頁)

ここで「前述のように」と言うのは、上引箇所先立つ部分の「1911年10月、日本より布哇宗教視察員として派遣された忽滑谷快天(ぬかりやかいてん)は、岡田が主任を務める当時のワイパフ布教所の様子を以下のように報告している。」(307頁)を指している。

いかが。筆者は、この浅井[2011]の導きによって、貴重な資料である『曹洞宗海外開教伝道史』を知ることが出来た。さらに『和融誌』という恰好な雑誌の存在をも知ることが出来た。本稿は忽滑谷快天の宗命による欧米遊学の実情の闡明を目指したものであるから、以下には、明治44(1911)年、明治45/大正元(1912)年、大正2(1913)年、大正3(1914)年刊行の『和融誌』第15、16、17、18巻に見られる忽滑谷快天の遊学関連の記事をピックアップしてみよう。これらの記事によって、山内[2009]の不明瞭な、憶測を交えた、忽滑谷快天の明治44(1911)年11月よりの、「宗命による三ヶ年間の欧米巡錫」の実情がほぼ明瞭になると思われる。

月刊『和融誌』和融社(曹洞宗大學内)(山田孝道他編集&発行)

◎第15巻第10号(明治44年10月5日発行)第183号

「▲今學年は職員に大異動是あり候、淺野老師、忽滑谷講師、鷺尾講師、ブレフエーア講師、高橋文學士等辭任せられて、原田祖胤師 堀文學士、祥雲文學士、西村文學士、松田講師等新たに就任致され申候。

▲只一夜の宿を共にせし旅人すら別れとなれば悲しきに、ましてや多年洞門教育に身を委ねさせられ候淺野老師、忽急[マ]谷老師等を始め諸講師に別れ候は又格別に別れのおしまれ候、然し淺野老師には今度其自坊に御歸山の上僧堂開單せられ、實地的に洞門青年の教養に勉められ候由にて候。

▲又忽滑谷老師には向ふ五ヶ年間の豫定を以て、禪的傳道の傍ら宗教視察として歐米に渡航せられ候由に御座候。

▲去月十七日には是等諸職員歡送迎會、並びに大森老師歸朝歡迎會、新入生歡迎會等を合せて本大學講堂に於て午前九時より開會致し申候、主客歡を盡して閉會を告げ候は正に午後一時にて候ひし、其式次は左の如くにて候。・・・」(862頁)

◎第15巻第11号(明治44年11月5日発行)第184号

雜纂

「忽滑谷先生を送るの記

茂木無文

・・・<sup>6</sup>」(920-924頁)

◎第16巻第6号(明治45年6月5日発行)第190号

彙報(459-462頁)

同人消息

「▲忽滑谷快天師 米國遊學中なる同師は其後本邦人竝に白人のために禪學を講ぜられ目下瑜珈[マ]禪の執筆公刊中にて、尚サンノゼ神學校、ロスアンゼルス南加州大學サンチャゴ神學校等を歴訪し研究せられつゝある由。」(460頁)

<sup>6</sup> 本節の末尾に全文復刻して再録。

◎第 16 卷第 7 號 (明治 45 年 7 月 5 日發行) 第 191 號

彙報 (535-539 頁)

教界雜報

▲忽滑谷師より 米國學界を視察中なる同師が、此の程曹洞宗務院に寄せたる報告書には、在留邦人は何れも禪宗の話を聴きて悦び居る事、又た米國民中禪學的思想を有するものゝ多きこと、及び先年市俄古の宗教大會以後、瑜伽宗の信者頗る頗る多數に上り、已に一勢力をなし居る事等詳記しあり、以て米國に於ける佛教の大勢を知るに足るべし」(535 頁)

◎第 17 卷第 4 號 (大正 2 年 4 月 5 日發行) 第 200 號

彙報 (331-334)

教界時報

「■印度に佛教なし 印度甲他大學名譽教授、曹洞宗學師山上曹源師は先般歸朝し、最高の學府甲他大學に於て中觀思想の講座に學ばんとして、堂々たる大學にして大乘の空思想を解するなく、空見外道の域を脱せざるを知れりと、他は推して知るべきのみ、爰に於てか佛教家有志間に大乘佛教の逆輸入の企畫をなすものあるに至れりと。」(331 頁)

◎第 17 卷第 7 號 (大正 2 年 7 月 5 日發行) 第 203 號

彙報 (586-588 頁)

同人消息

「△忽滑谷快天師 過般米國より渡英せらる。」(588 頁)

◎第 17 卷第 9 號 (大正 2 年 9 月 5 日發行) 第 205 號

同人消息

「△忽滑谷快天師 在英中なる師は近日中に英文の禪學書を倫敦にて出版せらるゝよし。」(748 頁)

◎第 18 卷第 1 號 (大正 3 年 1 月 5 日發行) 第 209 號

彙報 (94-96)

教界時報

「●忽滑谷快天師の著書 目下洋行中の同師は今般英京倫敦に於て「The religion of the samurai」と題する書を著はし大いに我が禪宗を鼓吹して普く

佛教学研究界に禪の本領を照介し斯界に貢献する所少からず。

●山上曹源師の著書 本宗海外留學生として印度に赴き多年印度北方佛教を研鑽し、其蘊蓄を究めて久しく、カルカッタ大學名譽教授として教鞭をとり昨年事情の爲め歸國せられたる同師は廣く佛教哲學の根本原理を説き教理の發達を詳述せる「Systems of religioustie thought [マ] 7」を著はし過般同大學出版部より出版せり。」(94 頁)

同人消息

「△忽滑谷快天師 目下在英の同師は豫定の通り本年四月歸朝の由なり。」(96 頁)

◎第 18 卷第 5 號 (大正 3 年 5 月 5 日發行) 第 213 號

彙報 (402-404)

教界時報

「■忽滑谷快天師歸朝 一昨々年海外教界視察の途に上りし同師は二ヶ年有餘歐米各國を漫遊して三月英國を出發し歸途印度佛蹟に參拜して先月中旬歸朝せられたり近く従前の通り本學講師に復職せられ本學の爲め極力御盡力下さるとの由」(402 頁)

同人消息

「■忽滑谷快天師 豫て歐米漫遊中の同市 [マ] は四月十四日神戸上陸同十九日無事新橋着近く同人と教壇に見ゆべしと。」(404 頁)

◎第 18 卷第 6 號 (大正 3 年 6 月 5 日發行) 第 214 號

彙報 (487-490 頁)

教界時報

「▼忽滑谷師懇話會 先般歸朝せられたる忽滑谷快天師の爲に有志發起して去月十日東京芝青松寺に於て歓迎を兼ね懇話會を開催せり、來會者百餘名盛會を極めたり」(487 頁)

◎第 18 卷第 7 號 (大正 3 年 7 月 5 日發行) 第 215 號

彙報 (574-577 頁)

同人消息

<sup>7</sup> 正しくは、Yamakami Sogen, *Systems of Buddhistic Thought*, University of Calcutta: Calcutta, 1912 のことだと考えられる。

「▽忽滑谷快天師 病氣の爲め各地の夏期講習會を中止し目下靜養中。」(577頁)

◎第 18 卷第 8 號 (大正 3 年 8 月 5 日發行) 第 216 號

「英國農民の慘狀を論じて我國地方經營の急務に及ぶ\*」

忽滑谷快天

今日は英國農民の現状を話して見たいと思ひます、……(文責在記者)」  
(639-644 頁)

(\*) 第 18 卷總目次には「歸朝談 忽滑谷快天」とある  
彙報 (655-656 頁)

教界時報

「▼佛教青年會の講師及講題 既報本月二十四日より一週間開催せらるゝ大日本佛教青年會夏期講習會の講題及び講師は

禪話 忽滑谷快天師

……」(655 頁)

同人消息

「▽忽滑谷快天師 病氣の爲め熱海に避暑療養中」(656 頁)

◎第 18 卷第 9 號 (大正 3 年 9 月 5 日發行) 第 217 號

彙報 (724-727 頁)

「▼曹洞宗大學の新講座

忽滑谷講師の擔任せる辯論學及別記の撰擇科目\*」(724 頁)

駒澤便り

「▼新學期と共に忽滑谷快天師は復職せられ、山上曹源師、若守義光師、島地大等師等の新しい諸講師を迎へる事になりました」(724 頁)

(\*) 英語も擔當 (725 頁)

同人消息

「▽忽滑谷快天師 本學講師に復職せらる」(727 頁)

◎第 18 卷第 10 號 (大正 3 年 10 月 5 日發行) 第 218 號

<sup>8</sup> 忽滑谷快天の「歸朝談」として、「英國農民の慘狀を論じて我國地方經營の急務に及ぶ」という題目の講演がなされていることは、忽滑谷快天の英国滞在を如実に伝えるものである。

彙報 (794-795 頁)

駒澤便り

「□歸朝以來病に冒されてゐた忽滑谷快天師は未だ教鞭を採る程に至らず止むなく同講師擔任の英語科は一時山上曹源師が受持つことゝなつた。吾人は切に忽滑谷師の一時も早く快癒せんことを祈る。」(795 頁)

【旧資料再録】『和融誌』第 15 卷第 11 號(明治 44 年 11 月 5 日發行)(920-924 頁)

[920p] 忽滑谷先生を送るの記 茂木無文

忽滑谷先生が洋航されると云ふことは自分が在石州中に既に聞いた、とは云へ先生から改めて通知があつたでもなく又誰から公然話しがあつたと云ふでもない、寄寓の主人大島氏が何かの用事で手紙を呉れた時末筆に一寸其事が書き添えてあつた、それをキッカケに「修養」并に本誌の紙面で始めて詳しい事を聞いたのである。七年來同釜の飯を喫して居た先生が突然洋航されると云ふのだから何だか心せわしいやうな感じがして落ち付いて居られなくなつた、石州では自分を大に重寶がつて本年一杯は是非とも居て呉れと云つて居たのであるが、強いて振り切つて歸京したのも此の落ち附かぬ心持が慥に原因の一つとなつて居たのである。處が自分の歸京したのは八月二日の朝で先生の歸京期は同月十日頃と極つて居た、自分は舊曆盆會の爲めに五日迄には是非とも埼玉の自坊へ歸らねばならぬ、成らう事なら十日頃迄滞京して先生の御目にかゝり久しぶりで快氣焰を吐いたり吐かれたりしたかつたのであつたが如何とも致方がない、で兔に角歸寺して盆を濟ませ速かに上京しやうと思つたが考へて見れば先生は歸京せられたものゝ今の處東京には居られぬ、多忙は先生の持ち前で平生でも中々落ち附いては居ない、殊に夏期と來ては南船北馬と云はうかその忙はしきは [921p] 實に目も當てられぬ、今夏は殊に又おいとまと云ふ格でもあろう殊の外の大多忙とあつてなまじ上京しても逢ふことは出来ぬ、と云ふやうな都合でとうゝ九月の中旬まで御無沙汰をキメこんだ 然るに雑誌などの報ずる所によれば九月廿六日の出帆とある、して見るとヘタを孫搗げば出發前に拜眉を得るの暇がないかもしれぬ、十六日に當大學では送別會がある事も知つては居たがそれに出席罷り成らぬ用事が出来た、とつおいつ如何がはせんと思ふ折から大島氏から葉書が來た、曰く先生は十八日から九月中自坊に居られるとの事だから尋ねる積りなら行け云々と、さあこう成つて見ると寸時もヂツとしては居られない、先生の住地と自分の雪隠とは郡こそ異れ相距ること僅かに七里、交通機關は何物



もないが田舎に居れば七里や八里の徒歩旅行は屁でもない、で早速に仕度して十九日に先生を住地なる澁井の蓮光寺に訪ふた、昨年十二月に別れて以來久方振りの拜眉である、先づ四方山は抜きとして早速乍ら出帆の期日を伺つて見ると……何の事だ來月の十一日だとある、其頃には自分も上京して居る豫定になつて居たのだから早くそれと知つたならこんなにヤキモキするのでもなかつたと聊か拍子抜けがした、兔も角も態々御尋ねしたのだから先生も大に満足してくれて田舎相當の待遇を以て其日は事なく別れた。先生は十月一日を以て上京して夫れゞ旅仕度をされるとの事であつ [た] から自分も早く出京して及ばず乍ら何かど手傳はうと殊勝らしい考だけは起したものの、九月廿九日から向十日間寺坊の用事で他行せねばならないハメに陥つた、先生には何とも濟まないやうな氣もしたが萬不得已用事とあつては是非もない、殊に先生は既に充分の仕度も整つて居られるのであらうから何ぞ強いて一個の我輩なぞを要せんやなんと勝手に考察を下して悠然として用事を濟ませ十月七日と云ふに漸く上京以て僅かに三日間先生の左右に侍するの光榮を得た。寄寓へ戻つて見ると流石に取込んで居る、先生の家族も来て居られる、訪問者は引きも切らぬ、行李やカバンはそちこちに轉がつて居る、衣類の脱ぎ捨てられたもの、洋服の出來たて、靴の買ひた [922p] て、屑紙、屑繩さては本箱の明いたの机の古手など坐敷一杯に取り散らされて居る、中にも一きは目立つて見えたのは床に安置し奉られた白木の觀音像であつた、高さは僅かに一寸六分五厘、一葉の蓮花に乗つた坐像であるが容姿端嚴微妙とでも申さうか洵に崇高で森嚴で一見直ちに憧憬の情禁ずる能はずと云つたやうな尊像だ、それも其筈、備後とやらの奇人濱田行慶と云ふ彫刻家が精進垢離一週間、肝膽を凝らして彫り上げたものだと云ふ、つまり先生の洋航を守らせ給ふべく高祖大師船難の故事に倣つて斯くはものしたのだそうな、本人から像へ添附して送つたいはれ因縁來歴があつたから一寸讀んで見たが中々以て得難い尊像と申し奉るの外はない、材は桧、京の三十三間堂金剛棚の靈木とある、いはれ因縁は長くなるから略すが、兔に角先生も大いにお氣に召したと見えて毎朝禮拜供養されて僅んで奉帶せられた様子であつた。餘事は休憩、先生は貨幣の換算から眼檢やらに相當の時間を與て置かねばならぬとあつて、乗船モンゴリヤ號の解纜期日に先つこと三日即ち十月九日に東京を發足して横濱へ行くことゝなつた、汽車は午前の七時半と云ふのだから朝寢しては居られない、寄寓の人々も先生の前途を祝すべく赤飯などを用意して愈々九日を待ち明かしたがお相憎様の雨天……而も念入りの

ドシャ降りと来たので聊か閉口したが、お別れの涙雨だなんと洒落を言ひ乍ら朝の六時に寓を出た、家内一同見送ると云ふので雨の中をゾロゾロ七八人、伊皿子から電車に乗つて新橋に着くと見送りの人もポツポツやつて来る、聽て時間も来たとあつて急いで一等室へおん乗り込ませ奉ると見送の連中は型の如く場内に面を竝べる、汽笛一聲……いつも乍ら別れる刹那は善い氣持のものでない、見送人約三十名程中には天下の名士も居り中には寒貧の書生も居たが、十一日に横濱で送らんの目算を以て今日は見合せをキメ込んだものか割合に見送が少数であつた、代りには有難無難の野次的連中は皆無で何れも一騎當千、否眞實奉送の心懸を以て来たもの斗 [923p] り、先生に取つては却て好ましかつたかも知れぬ。第一回見送りはこれで相濟となつたが、お次は一寸念入りで横濱迄出馬あらせられなければならぬ、敢てそれを苦に病む譯ではないが氣がゝりなのはお天氣だ、今日のやうに降られては……と寄寓の主人と顔見合せて啣つ折から横濱から葉書が飛來した、曰く出帆期日が一日後れることに成つたと、サア天下の一大事、それと知らずに十一日に出演する者があつては氣の毒だと所々方々へ電話を掛けるやら奔走するやら、西久保に露影兄の門を叩いた頃は正に午後十一時、強盜と間違えられて大に弱つた、後で聞けば要所々々へ同じやうな葉書が出てあつたのだとサ、御苦勞様とは蓋しこれをしも云ふなんめる。

十二日となつた、天氣は幸にも極上々吉である、先生の葉書が聊か曖昧で出帆が十二時だか乗込が十二時だか判然と分らぬ、然も早いに過ちは無からうとあつて朝飯を済ますや早々出發して九時前に着いた、宿屋が知れないので大に赤毛布を演じた筋もあるが今はお預りとする、宿屋へ上つてお座敷へ通ると最早澤山の見送がつめかけて居る、中には泊り込みの人さへあつた、檀徒總代が二名斗り田舎から、高徒仲榮壽君は岡山から會也了由君は伊豆韭山から何れも遙々とやつて来たのである、本大學からは松田講師、溝江、伊藤、綾富君等の各職員、生徒方が四五名、越山出張所からは高島養麟師菊池孝順、田中慈光の兩君等、武山からは青山渡邊龍興師等、東京寺院としては吉祥寺の岩本師、俊朝寺の露影宗匠、常林寺の檜原師、功運寺の大溪君竝に寄寓南臺精舎の主人大島君等顔を竝べたお歴々方々二十有餘名、乗船の通知を相圖にゾロゾロ焉として本船へ乗り込み先に立つた先生をば船室迄送りこみ又ぞろ共に甲板を逍遙する中、大島氏得意の技を揮つて三四回の撮影に非ずだ、斯くて先生は布哇某學校長今村先生なる人と共にモンゴリヤ號一等室四四號を占領して愈々船中の人となつた、一同は時間の來るを待つて端艇に移り聲

を揃えて萬歳・・・・ともなとも云はず僅に御機嫌宜うの一言を置土産として茲に第 [924p] 二回の見送りを終了した。

斯くて忽滑谷先生は東京を去り横濱を去り而して終に日本を去つた、今頃は多分布哇に舊知と遇ふて物語りの最中ででもあらう、去つた先生は兔も角も去られた東京否日本の佛教界は聊か寂寥を感じるであらう、殊に自分等の如き後輩に至りては大に心細く感ぜらるゝのも無理はあるまい、何しろ七年の間、常に膝下に侍して時には氣焔を聞き時には新説を叩き學業に就ては云ふも更なり身の上の心配から衣食の周旋迄も爲て頂いた先生に別れて今は宛ら暗夜に燈を失ふたやうな有様である泣事を並べては際限がないから先づこの位で擱筆としよう。

### むすびにかえて

前節で紹介した『和融誌』の記事だけからでも、山内 [2009] 所載の「忽滑谷快天先生略年譜」中の「明治四十四」の記事「十一月宗命ニヨリ宗教及ビ學術視察ノ為洋行三ヶ年間欧米ヲ巡錫ス」(282頁)、本稿冒頭に掲げた筆者による《忽滑谷快天略略年譜》(1867-1934)中の「明治44(1911)年11月宗命により宗教及び學術視察の為洋行、三年間欧米を巡錫する」の実情がほぼ明瞭になるのではないだろうか。

忽滑谷快天は、

明治44(1911)年10月9日新橋を發ち、10月12日横濱からモンゴリヤ号で離日、

ハワイ、米国に滞在し、

前記 Nukariya [1913]、忽滑谷 [1913] を執筆後の大正2(1913)年7月5日以前に

米国を離れて渡英、英国滞在中にその二著を刊行。離英してからは、インドを経て

大正3(1914)年4月14日神戸、同月19日新橋に到着、無事帰朝を果たした。

足かけ4年、実質2年5ヶ月ほど(三ヶ年間)の巡錫<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 但し、本稿冒頭で紹介した忽滑谷 [1913] の「序」の記述「予や故山を去つて茲に半歳」と「大正二年五月二十日」の謎は依然謎のままである。今後の課題としたい。

【略号・参考文献】

『駒澤大学八十年史』(19631015)

『駒澤大学百年史 上巻』(19831015)

『曹洞宗海外開教伝道史』(19801110)

『和融誌』第15巻(1911)、16巻(1912)、17巻(1913)、18巻(1914)

Monier-Williams, Sir Monier

[1891]: *Brāhmanism and Hindūism; or, Religious Thought and Life in India*, London.

Nukariya Kaiten

[1913]: *The Religion of the Samurai: A Study of Zen Philosophy and Discipline in China and Japan*, London.

浅井宣亮

[201105]: 「20世紀初頭のハワイにおける曹洞宗」『愛知学院大学禅研究所紀要』第39号

忽滑谷快天 (1867-1934)

[19130715]: 著『養氣鍊心乃實驗』東亞堂書房: 東京

[19251115]: 著『鍊心術』忠誠堂: 東京

山内舜雄

[20011116]: 著『道元禅の近代化過程』大蔵出版: 東京

[20090527]: 著『統道元禅の近代化過程―忽滑谷快天の禅学とその思想 (駒澤大学建学史)』慶友社: 東京

(本稿は平成24～26年度科研費補助金に基づく研究の成果の一部である)